

Title	初期マルクス研究におけるひとつの問題：フェルダー「一八四八年の革命前夜におけるマルクスとエンゲルス」における"真正社会主義"の解釈について
Sub Title	A problem on the study of "Young Marx" Herwig Förder; Marx und Engels am Vorabend der Revolution : Die Ausarbeitung der politischen Richtlinien für die deutschen Kommunisten (1846-1848)
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.3 (1962. 3) ,p.269(61)- 284(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19620301-0061
Abstract	
Notes	社会思想史研究特集 資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- (1) 「資本は、一國の富のうち、生産に使用される部分であり、食物、衣服、道具、原料、機械など、労働をして有効ならしめるに必要なものよりなる。」(Principles, Gerner's edition, p. 72. 堀経夫訳、八六頁。Labour's Wrongs, p. 197.)
- (2) 「人口が生活維持手段を圧迫しつつあるとき、唯一の救済策は、人民の減少か、あるいはより急速な資本の蓄積かである。」(Principles, pp. 76-77. 訳、九一頁。Labour's Wrongs, p. 197.)
- (3) 「需要は生産によってのみ制限されるのであるから、一國において使用されない資本額は全くない。」(セーからの引用。Principles, p. 273. 訳、三一六頁。Labour's Wrongs, p. 197.)
- (4) 「一國の富は二つの方法で増加される、すなわちそれは生産的労働の維持に収入のより大なる部分を使用することによって増加される、あるいは、それはならん労働の附加的分量を使用しないので、同一の分量をより生産的ならしめることによって増加される。」(Principles, p. 263. 訳、三〇三—三四頁。Labour's Wrongs, p. 197.)
- (5) 「公衆を本位自体がこうもる変化以外の通貨の価値のある他の変化にたいして保全し、そして同時に最も出費のからならぬ一媒介物をもって流通をおこなうことは、通貨がもたらされる最も完全な状態を達成するところである。」(Principles, p. 344. 訳、三九七頁。Labour's Wrongs, p. 198.)
- (6) 「すべからずの時にあつて、それを生産するのに骨折と労働との同一の犠牲を要する商品のみが、不変なのである。」(Principles, p. 260. 訳、二九九頁。Labour's Wrongs, p. 189.)

- もるローウエンソール (E. Loventhal: The Ricardian Socialists, 1911, Chap. V, VI.) を批判するため右の詳細な引用をおこなったようにであるが (Jolliffe, p. 4, note 3.)、これだけではローウエンソールの見解——もともとこれも明確な論証を基礎にしているとはいえないが——の批判として不十分である。リカードとリカード派社会主義との関係は後者の性格規定によって一つの重要な問題である。もしもたりに下を参照。P. H. Douglas: Smith's theory of value and distribution, J. M. Clark and others; Adam Smith, 1776-1926, 1928, pp. 95-103. G. Adler: Ricardo und der ältere englische Sozialismus. Verteidigung der Arbeit gegen die Ansprüche des Kapitals von T. Hodgskin übers. von F. Kaffel, 1909, SS. 9-23.
- (10) コールはブレインの『労働の不当な処遇』を特徴として「オーウェン主義、フラス、ホジスキンの」と述べている。(G. D. H. Cole; op. cit., p. 133.) また「反資本主義の経済学とオーウェン主義者の協同体学説と」(「社会主義の総合」)の「G. D. H. Cole」(p. 118.)
- (11) Working Man's Advocate, Vol. IX, No. 23, May 3, 1873. The Word, Vol. II, No. 5, Sept. 1873. Bray Material, Vol. I, Item 23. 以下の論説「インマンとオウ」(Macaulay, Brougham, Oastler, Cobbett, O'Connor) の「インマンとオウ」の「Vol. III, Item 10.」を参考。インマンの著書参照。
- (12) Steps to Reform. (MS), 1894, Bray Material, Vol. III, Item 9. Jolliffe, p. 13.
- (13) G. D. H. Cole; op. cit., p. 130. 244, 135, 186-7.
- (14) Bray Material, Vol. I, Item 18. Inglis, pp. 15-16.

初期マルクス研究におけるひとつの問題

フェルダー「一八四八年の革命前夜におけるマルクスとエンゲルス」
 (Hervig Förder: Marx und Engels am Vorabend der Revolution — Die Ausarbeitung der politischen Richtlinien für die deutschen Kommunisten [1846-1848], 1960) における「真正社会主義」の解釈について

飯 田 鼎

カール・マルクスの伝記的研究は、古くはフランツ・メーリングの古典的業績⁽¹⁾やカール・フォルレンダーの哲学的省察⁽²⁾、さらにE・H・カーのユニークな研究⁽³⁾もしくはリヤザノフの簡潔な伝記⁽⁴⁾などをはじめ、すぐれた著作が少くない。そして今もなお多くの伝記が書かれ、それらを加えるならば、マルクス研究は実に枚挙にいとまなしといわなければならない。最近ではとくに、一八四八年の革命を頂点とするいわゆる初期マルクスにかんする業績が、つぎつぎとあらわれ邦訳されつつあるのは注目すべきであらう。

初期マルクス研究におけるひとつの問題

初期マルクスもしくはマルクス主義の定礎期ともいうべき一八四八年の革命以前の研究、その思想形成史ないしマルクス主義経済学の生成過程にかんする研究は、つぎのいくつかの傾向にわたることができるとはなからうか。たとえば、ジェルジュ・ルカーチの研究⁽⁵⁾のように、「ヘーゲル主義を克服し、さらにフョイエルバッハをもこえて唯物弁証法の基礎をきすくに至る過程と革命的民主主義から科学的社会主義へと進む発展との関連の把握、理論上の成長過程と政治上の成長過程との必然的な統一を目指して苦闘するマルクスの精神形成史をとりあつかうものであって、主として哲学的・思想的な側面の追求がまずあげられねばならない。

周知のように、一八四四年に書かれたと思われるマルクスの経済学II哲学手稿の一九三二年における発表は、マルクス主義体系の根幹ともいべき史的唯物論の源泉やヘーゲルのマルクスへの影響を研究する上において新しい光を投じたものであったが、その意味では、この初期マルクス主義の重要な理論的結晶ともいべき「経済学II哲学手稿」にあらわれたマルクスの疎外論にかんするマルクレーゼの論稿⁽⁶⁾が良知力、池田優三両氏によって邦訳されたことは喜ばしい。本書のあとがきで、訳者のひとり良知氏は、初期マルクス研究の重要性について「およそ一つの哲学体系をきざぎざあげようとするばあい、論理の発想のみならずじに真の独創などというものはありえないのかもしれない。ところが、体系の発想になんらの独創がみられない場合でも、先行する体系をそのまま継承するのではなく、たえずそれを否定し、否定するという行為そのものなかに思想の独自性が主張されることもある。…体系そのものをきざぎざあげることではなく、むしろ既成の体系を否定する発想のなかに積極的構成の意図が求められる場合には、しばしばそのような否定的衝動のなかにその後の思想と行動をみちびく論理の糸がみいだされる。あたかもその意味で、マルクスにおいても初期の諸論文が考察の焦点となりえたのではないだろうか」とのべておられる。

この表現は、若きマルクスにみられる強烈な自己主張と既存の權威と価値体系にたいする挑戦、苦闘そして克服の過程こそ、マルクスの思想的展開そのものにはかならなかつたことを道破しているのだが、しかしこうした既成の思想体系との対決そして否定というマ

ルクスの行動は、良知氏のいうように、必ずしも否定的衝動としてのみあらわれたものではなかつた。マルクスの思想体系の形成は、一方において思想家としての、若きヘーゲリアンとしての立場から革命的民主主義者のそれへ、そしてさらに革命的共産主義への途を歩むなかで、他方、それと密接不離の關係において革命家として社会主義革命のための実践を行うことを通じて錬成されたものであった。従ってその意味においては、あたかも衝動的とも映るマルクスによる既成の理論体系の否定、その容赦のない無慈悲ともいべき攻撃は、革命的実践の正しい認識に違背するあらゆるイデオロギーに加えられたのであるといべきである。

つぎにマルクスの著作と思想を、彼の行動、彼の闘争、ならびに当時の「イデオログ」との間に闘わされた論争を通じて跡づけ、彼の行動、闘争、論争そのものを、マルクスが生きてつ関与した歴史的諸事件、諸条件と関連させつつ考察させたもののなかに、ルフェーヴルの業績がある。彼が本書のなかで意図したところのものは、必ずしも「初期マルクス」の時代に限定されてはいないが、著者の問題意識はその思想的な立場にもかかわらず、まことに示唆に富む。ルフェーヴルが、その著「カール・マルクスの思想を認識するために」を書くにあたって狙いとして定めたところを要約してみると、

(a) マルクスの思想とその学説は、のちに次第に深くみていくように、複雑で相互に関連した側面に非常に富んでいる。学説の経済学的、哲学的、道徳的、政治的な側面をその総体において解明する

こと。

(b) マルクスの思想が把握しがたいのは、彼が、自己の理論的発見を、「概論」のかたちで示さなかつたこと。マルクスならびにエンゲルスの著作は、大部分論争の所産であり、彼らの思想そのものは、イデオロギー闘争、政治闘争の過程で形成された。彼らの思想は、たえず、既成の理論的、政治的命題に抗して、明確にされていったのである。

(c) マルクスおよびエンゲルスの思想は、ただたんに、闘争し行動しつづつある思想——そしてその闘争の過程で生まれた思想——であつたばかりでなく、展開しつづつある思想でもあつた。⁽¹⁰⁾

この場合とくに注目すべきことは、初期の重要な著作、一八四四年の「経済学II哲学手稿」、「ドイツ・イデオロギー」、「ヘーゲル法哲学批判」などであつて、マルクスが資本論のなかで樹立した科学的社会主義に到達するための方法論上の武器を、これらの一連の哲学的経済学的な著作をつづけることを通じて把握したということ。ルフェーヴルが強く強調しているのは正しい。従つてこの点からもマルクス主義の正しい理解の前提が、「初期マルクス」の研究にあることは明らかである。

これらのほかに初期マルクスにかんする最近の研究としてよく知られているものは、マルクス経済学説の体系を概観したローゼンベルクの「初期マルクス経済学説の形成」やコルニエの研究をはじめとして、ハロルド・ラスキの「共産党宣言への歴史的序説」やガロデーの「科学的社会主義のフランス的源泉」のようなユニークな

初期マルクス研究におけるひとつの問題

ものもあり、またわが国における注目すべき研究としては、杉原四郎氏の「ミルとマルクス」(ミネルヴァ書房)があるが、われわれはいまこれらをひとつひとつ検討する余裕はない。

ただひとつ、今日われわれは何故に初期マルクスに注目するのか、何故にそれが研究の焦点となるのか、そしてさらに、われわれはどのような姿勢でこの問題にとりくまねばならないか、およそこうした問題をたえず想い浮かべずにはおられないということである。その場合、問題は社会科学研究に専心する者の基本的態度、その主体性にかかわるものである。(一)革命的共産主義者となるまでの人間形成における苦闘と思想的変革の過程——初期マルクスの時期——においてマルクスとエンゲルスが遭遇したさまざまな矛盾と懊悩を、彼らがいかに克服したか、この思想的な苦悶と相剋は青年時代におけるはげしい超人的な勉強と討論、実践へのひたむきな努力と熱情とによって克服されたのであろうか、こうした思索と実践との統一への精進は、現実に理論だけを研究し、実践にふみきれないインテリゲンチヤとしてのわれわれの弱さを暴露し、その日和見主義を鞭うつ。(二)つぎに重要なことは革命の戦術的な問題である。すなわち一八四八年の革命の前夜におけるヨーロッパが直面しつづつあつたさまざまな矛盾を、彼らがいかに冷静に観察し、具体的に把握しそしてそのなかで正しい闘いのすすめ方を研究していたかという点である。すなわち革命の性格の規定が実に正しかったということ、イギリス、フランスそしてドイツなどの国々における諸条件のちがいの正確な分析は、公式的な断定やドグマの横行にたいするき

わめて有効な武器であり、現代のわれわれをきびしく戒めるものがある。

そして最後に、マルクスとエンゲルスがその青年時代を過した一八四八年の革命を中心とする時期と現代との比較が改めて問題とされねばならないであろう。

ソ連邦共産党第二回大会に上程され、採択された共産党新綱領の前文には、つぎのように書かれている。

「百年以上も前に、『共産党宣言』の中において、プロレタリアートの教師カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスは、『幻影』がヨーロッパをさ迷っている——それは共産主義の亡霊であるとのべている。全国のプロレタリアの勇敢かつ献身的な闘いは、人類をして共産主義の方向により近づけさせるに至った。当初は数百であったが、その後は数千、数百万のコミニズムの理想に鼓舞された人々が古い世界に立ち向って突撃を開始した。パリ・コムニューン、十月革命、中国その他ヨーロッパおよびアジアの一連の国々における社会主義革命こそは、共産主義の勝利をめざす世界労働者階級の英雄的闘争の重要な歴史的目標である。想うに今日までにおいては、国民の幸福をめざす闘士たちの血にまみれた巨大な道標と輝かしい勝利と一時的敗北を経てきた道標が踏破されてきたが、かつては単なる幻影としかみられなかつた共産主義は、すでに今日の偉大な勢力となり、地球上の宏大な地域にわたって創られつつある社会となったのである。」(傍点は訳文太字)。

て生み出される反動的な社会主義としての「小ブルジョア社会主義」、「封建的社会主義」、保守的的社会主義またはブルジョア社会主義、批判的「空想的社會主義」などの諸流派が混然として労働者階級の運動に影響をあたえていた。マルクスとエンゲルスの努力は何よりもこれらの社会主義の階級の基礎を明らかにし、これらを批判克服することに注がれたのであって、これこそ初期マルクスにおける最も重要な課題を形成していた。だとすればわれわれが初期マルクスを学ぶことによって得られる思想は、現在の時点において労働者階級の運動にさまざまな影響や陰影を投じつつあるものもろのイデオロギートの役割を正しく評価することではなければならない。マルクスとエンゲルスの著作を熟読するならば、真正社会主義にたいして試みられた徹底的な批判は、一八四八年のブルジョア革命以前の反動的・小生産者イデオロギーにたいして一般にむけられたものであったが、それは同時に現在のわれわれをとりまく、そしてともすればわれわれを汚染しようとする小市民的・日和見主義にもっともよく妥当することを認識する必要がある。

そしていまひとつ、一八四八年の革命前後における重要な問題としては、民主主義、民族主義そして社会主義の問題がある。しばしば指摘されるように、一八四八年前後のイギリス、フランスおよびドイツを中心とするヨーロッパは、資本主義発展の上で、いちじろしい不均等現象が目立ち、従ってイギリスのように産業資本の基礎を確立し、近代的労働者階級の階級的成熟の結果として労働組合運動と革命的政治運動としてのチャーティスト運動が展開され、ブル

初期マルクス研究におけるひとつの問題

百年前の幻影が偉大な歴史的現実となり、世界の趨勢を大きく動かしつつあることを今日何人も疑う者はいないが、しかし問題は、百数十年前の一八四八年革命の前後において、マルクスとエンゲルスが予測しつつあった社会主義革命への展望、そしてその途上に横たわるさまざまな障碍や矛盾、これらが百年後の今日、どのような形で解決されもしくは課題として残されているかという点である。世界的な視点に立つならば、一八四八年革命の前後において、マルクスとエンゲルスが対決し、あるいはその解決を課題としたさまざまな問題は、共産主義体制が世界全人口の過半を包括し、その面積は五分の二に達する今日においても、依然として根強いものがあり、帝国主義が体制的な危機に頻するに依りて鋭くあらわれざるをえないという客観的事実である。

より具体的にいうならば、ヨーロッパ資本主義発展史上において、一八四八年という年のしめる重要性——産業資本の確立とこれにもなうプロレタリアートの階級的成立、そして派生的な問題としての中産階級や独立小生産者層の没落といういちじろしい現象によって特徴づけられる——である。前衛としての共産党の登場を上げ知らせた共産党宣言の出現は、産業資本の確立、従って近代的プロレタリアートの成熟、労働組合の逞しい成長そして社会主義運動の発展に照応するものであったが、そこにはまた「宣言」がもっとも鮮明に提起しているように、ブルジョアジーとプロレタリアートとの間の階級闘争というもっとも基本的な矛盾のほかに、ブルジョアジーもしくは小ブルジョアジーの社会主義的運動における関係におい

ジョア民主主義革命の成果を布石として、社会主義革命への展望が描かれつつあった国と、ドイツにみられるように、封建的な生産諸関係が根強く残存し、小国分立という絶対主義的残滓によって統一的な国内市場の形成も、わずかに関税同盟というきわめて不十分な形でしか進んでいない国とでは、来るべき革命の性格についての評価、その革命を指導する階級の主体的な力の問題などで、超えがたい懸隔があったことは否定できない。いわんやドイツよりもはるかにおくれたイタリア、ロシアそしてポーランドのような国々においては、反動的な絶対主義にたいするはげしい闘い、民族の独立と統一を求めた民主・民族主義の闘いが、社会主義よりもむしろ緊急な課題として急進的な知識人、階級的に目ざめた労働者、そして一部の革命的な小生産者をひきつけつつあったというのが現実であった。

すなわちマルクスとエンゲルスが一八四八年革命を前にして、はからずも臨まざるをえなかつたものは、資本主義発展の不均等の結果としての革命的な諸条件の各国におけるいちじろしい差異という歴史的現実の深淵であり、しかもそのような諸条件のなかで、来るべき革命をブルジョア革命と規定し、ヨーロッパにおける封建的・絶対主義勢力(その支柱としてのユンカーおよびツァーリズム)の打倒を実現することを第一段階として、これを通じてつぎに来らんとする支配階級としてのブルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争の諸条件がつくり出されるとしたのである。このように、一八四八年の革命にたいする評価は、ブルジョア革命の急速な実現こ

モプロレタリア革命の勝利のための条件をつくり出すということであって、従って革命的な運動の当面の目標は、来るべきブルジョア革命をできるだけ徹底的におしすすめることにおかれたのは当然であつた。

一八四八年以前のマルクスとエンゲルスがドイツにおける客観的状況を無視した真正社会主義者の絶対主義勢力との妥協、あるいはブルジョアジーの果す進歩的役割を全く否定してアナキズムに走るといふ態度、その小ブルジョア的世界観にたいして、きびしい批判と攻撃を加えたのは革命的状況を法的に把握した結果にほかならなかつた。

以上のように、初期マルクス主義研究が現在のわれわれに訓えるところは、きわめて深く且つ多岐にわたるのであるが、再び強調するならば、もつとも重要な問題として、民主主義、社会主義をして民族主義相互の關係があげられねばならない。当時のヨーロッパにおける資本主義発展の不均等という歴史的现实と、ブルジョア民主主義革命の切迫という事態の交錯を時代的背景とするマルクス主義形成期において、彼らがいかにしてこの問題を提起しそして解決していったか。かつてマルクスとエンゲルスという思想と実践における二人の偉人が百数十年前に深刻に悩み且つ考えた問題は、現在のわれわれの世界においても必ずしも解決しつくされたとはいえない。いなそれどころか、現代の世界はまさに、異なる姿においてではあれ、この問題が拡大された形において現われつつあるではないか。社会主義革命、ブルジョア民主主義革命そして民族主義革命

の巨大な流れがいまもなお大きな問題としてわれわれの世界を動かしつつあることは何人も認めざるをえない。だとすれば、われわれの「初期マルクス研究」への志向は、純粹に知的な理論的なインタレストと同時にその背後に、歴史にたいする省察と世界のきびしい現実にたいする深刻な認識なくしては、全く観念的遊戯におちいるほかはない。

- (1) Franz Mehring: Karl Marx, Geschichte seines Lebens, 1933. 栗原佑訳「カール・マルクス——その生涯の歴史」(大月書店)一九五三年、二卷。
- (2) Karl Vorländer: Karl Marx, sein Leben und sein Werk, 1929.
- (3) Edward Hallet Carr, Karl Marx—A Study in Fanaticism, 1934. 石上良平訳「カール・マルクス」(未来社)一九五六年。
- (4) Rjazanow: Karl Marx und Friedrich Engels.
- (5) Georg Lukács: Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx (1840-1844) (Deutsche Zeitschrift für Philosophie, 2, 2. Jahrgang, 1954, SS. 288-343) 平井俊彦訳「若キマルクス」(ミネルツァ書房)一九五八年。
- (6) Herbert Marcuse: Neue Quellen zur Grundlegung des historischen Materialismus, in: Die Gesellschaft, 2. Bd. 1932. Über die philosophischen Grundlagen der wirtschaftswissenschaftlichen Arbeitsbegriffs, in: Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 69. Bd. 1933. マルクーゼ著、良知力、池田優三共訳「初期マルクス研究——『経

済学」哲学手稿」における疎外論」(未来社)一九六一年。

(7) 前掲書の巻末に掲げられた良知力氏の論稿「初期マルクス解釈に「いて」を参照。

(8) H. Lefebvre: Pour connaître la pense de Karl Marx, 吉田静一訳「カール・マルクス——その思想形成史」(ミネルツァ書房)一九六〇年。

(9) ルフェーヴルは、ハンガリー事件を契機として、フランス共産党から除名されたといわれる。「訳者あとがき」より)。

(10) ルフェーヴル、前掲書五四—五九頁。

(11) ローゼンベルク、副島種典訳「マルクス経済学説の形成」(大月書店)昭和二八年。

(12) Harold Laski: Communist Manifesto, Socialist Landmark. A New Appreciation written for the Labour Party, 1948. 山村喬訳「共産党宣言への歴史的序説」(法政大学出版局)一九五〇年。

(13) Roger Garaudy: Les Sources Françaises du Socialisme Scientifique, 1949. 平田清明訳「近代フランス社会思想史」(ミネルツァ書房)一九五八年。

(14) ソ連共産党新綱領草案(経済評論九月号別冊附録三頁)。

二

ヘルヴィッヒ・フェルダーの「一八四八年の革命以前のマルクスおよびエンゲルス」(Herwig Förder: Marx und Engels am Vorabend der Revolution—Die Ausarbeitung der politischen Richtlinien für die

初期マルクス研究におけるひとつの問題

deutschen Kommunisten (1846-1848), 1960.) は、ヘルリンのドイツ科学アカデミーの一般史研究叢書第七卷 (Deutsche Akademie der Wissenschaften zur Berlin, Schriften des Instituts für Geschichte, Reihe I: Allgemeine und Deutsche Geschichte, Band 7) として公刊されたものである。著者の「まえがき」によれば、この労作は、一九五七年秋、著者がフンボルト大学哲学科にたいして、博士請求論文として提出したものであるといわれる。

筆者は先頃、ドイツの社会運動史や社会思想史の研究をはじめで、とくにドイツ民主共和国の研究動向に注目する者のひとりであるが、その労作のおびただしい出版にもかかわらず、その内容はこれにともなわず、ともするとイデオロギー的な評価によって歴史的な客観性がおきかえられ、公式的・ドグマ的な断定が横行しつつある現状について批判的な態度を持ってきた。こうしたなかにおいて、もちろんすぐれた労作も稀ではないが、いまここに紹介を試みるフェルダーの著作は、きわめて実証を重んじ、極端に党派的なイデオロギー的な態度にたいする批判的精神によって貫かれていると思ふ。

本書は、つぎのような内容から成っている。

- 第一章 序論。
- 第二章 前提。
- 第三章 ブリュッセルにおける共産主義通信委員会の建設と労働者階級の政治の問題についての最初の分析(一八四六年)。
- 第四章 一八四六年から一八四七年への移行と発端。

一八四七年の夏および秋の政治的関係において、ドイツにおける来るべき革命の政治上の諸問題。

第六章 共産党宣言。

著者が序文のなかで述べているつぎのような文章は、本書の狙いがあるか、しかも著者がいかなる視点からこの問題に接近しようとしたかを示すものである。

「資本主義の全般的危機の時期とこれと結びついて市民的・民主的自由と権利とを絶滅しようとする帝国主義的ブルジョアジーの努力は、あらゆる資本主義諸国におけるこのような自由と権利のための労働者階級の闘争に、あらためて異常な重要性をあたえた。さらにその上に、植民地ならびに従属諸民族の解放闘争もまた——そこでは民族ブルジョアジーがまだ進歩的役割を果たすことができるのだが——マルクスとエンゲルスが一八四八年に従った戦術および戦略を回顧せしめ提起する一連の諸問題を日程にのせたのである。」

ここには筆者がさきに強調したように、民主主義と社会主義そして民族主義をめぐる闘いが、帝国主義諸国、社会主義諸国をして被圧迫民族主義諸国相互の深刻な対立の反映としてあらわれているという現実と一致していることを物語っている。すなわちマルクスおよびエンゲルスが一八四八年の革命を前にして提起した深刻な問題は、著者のいうように、今日のわれわれの実践的な意図にたいして教訓的な役割を果たすことになるであろう。

周知のように、マルクス主義体系に接近しようとするれば、それはあたかも峨々として聳立する高峰の如く容易に近づき難い印象をあた

たえる。だがもし初期マルクスに問題を限定するならば、(一)一八四四年、エンゲルスの国民経済学批判大綱にはじまる古典派経済学の批判克服への方向、(二)ヘーゲルの観念弁証法を超え、フォイエルバッハの唯物論の洗礼をうけつつ、史的唯物論を体系づけるといふ哲学的方向、そして最後に、(三)ユング・ヘーゲリアンから革命的民主主義そして最後に革命的共産主義に至る職業的な革命家への途、および以上の三つの側面から、これらを相互に有機的に関連せしめて研究する必要がある。

フェルダールの業績は、主として第三の視点に焦点をあわせながら、一八四八年のブルジョア革命前夜において、いかに正確にマルクスとエンゲルスが、ドイツの状況を把握していたか、そして革命的な性格とその諸条件に科学的な検討を怠った小ブルジョアの・反動的な思想を攻撃するとともに、それらが生み出されたドイツの基礎を明らかにしようとしたかを彼らの実践的・革命的行動にそくして追求する力作である。従ってそれは、一八四八年の共産党宣言に至るまでの、マルクス、エンゲルスの革命家としての成長過程を、空想的社会主義、空想的・哲学的社会主義の消極的側面としての真正社会主義にたいする彼の批判克服即革命的共産主義の理論としてのマルクス主義の樹立の過程として把握し、とくに真正社会主義にたいする熾烈なイデオロギー闘争を高く評価している点で注目し値する。

マルクスとエンゲルスがウァイトリンの空想的社会主義とカール・グリューン等の真正社会主義に注目し、これにたいする攻撃の

火ぶたをきつたのは、つぎのような事情によつていた。すなわち、

エンゲルスが「ドイツ農民戦争」の序文にのべているように、他のすべての国々と同じように『革命的伝統』を誇ることのできるドイツ、従つて、来るべきブルジョア革命とそれにつづく社会主義革命において偉大な役割を果たす能力と使命とをもつドイツ・プロレタリアートの力を、正しく評価することができなかった空想的社会主義、そして絶対主義封建勢力にたいして革命的な勢力として登場しつづつたブルジョアジーにたいして反動的な攻撃を行い、ブルジョアジー革命の意義を全く無視した真正社会主義こそ、労働者階級をして革命の正しい路線から逸脱せしめるものであるという認識である。従つて本稿においては、著者が、マルクスおよびエンゲルスの真正社会主義を中心とする空想的反動思想にたいする仮借なき非難と克服とを、初期マルクス研究のなかでどのように位置づけているか、この点に焦点をしぼることにしよう。

著者はつぎのような一般的な前提の上に立っている。一八四八年以前のドイツにおいては、(一)資本家的生産様式がどの程度発達していたか——プロレタリアートの階級的未成熟。(二)一八四八年のドイツにおけるブルジョア革命の世界史的意義——一九〇五年のロシアと一八四八年のドイツとの比較——ドイツの労働者階級は、革命の指導をひきうけるにはあまりにも弱かったけれども、全体としての民主的運動のなかでもっともアクティブなもっとも前進的な前衛の役割をひきうけなければならなかった。すなわち基本的にはブルジョアジーと敵対関係にありながらも、封建的・絶対主義勢力に

初期マルクス研究におけるひとつの問題

たいしては、ブルジョアジーの、革命的ではないが自由主義的・立憲的 („liberal und konstitutionell“) という進歩的側面を評価せざるをえないプロレタリアート。(三)政治の動向を左右した都市の小市民階級、広はんな手工業者の層。彼らはツンフト的な強制から逃れようと努力し、その限りにおいて、一般的なブルジョアジーの反対運動の左派を形成していた。(四)フランス革命の経験、主として家内労働者からなる小さな社会主義団体「正義者同盟」のフランス社会主義即四季協会との結びつき。イギリスのチャーティスト運動の影響による職人的共産主義 (Handwerker-Kommunismus) 即ウァイトリンの共産主義の克服。(五)ドイツにおける空想的社会主義の二つの潮流、(六)フランスの空想的社会主義と共産主義の影響、(七)ユング・ヘーゲリアン——フォイエルバッハの唯物論から空想的社会主義への転化、しかしドイツの空想的社会主義には、偉大なフランスのユーロピアンの獨創性が欠如していた。以上のような一八四八年以前のドイツにおける一般的な前提の上に立って、著者は、マルクスおよびエンゲルスの真正社会主義の否定を通じての自己の哲学の体系化の過程を説明し、それによつてその階級の本質を明らかにしようとしている。

資本主義的發展のおくれたドイツにおいては、すでにみたように都市における中小市民階級が政治の動向を支配するほど根強い階級の基礎を保有し、しかも資本主義が次第に発展してゆく過程において没落を余儀なくされるとすれば、その階級のイデオロギーは、反プロレタリアート・反ブルジョアジーとして特徴づけられる。

著者はつぎのように評価する。真正社会主義者は、プロレタリアートの革命的な力を評価せず、日程にのぼっていたブルジョア的な権利と自由のための闘いにたいして反動的な態度をとる。問題は、このグループが、文筆上の小グループであり、組織に欠け、労働者階級との結びつきは何もなかったにもかかわらず、一八四五年以来「正義者同盟」にいちじるしい影響をあたえ、ロンドンではクリーゲが、パリではグリュンが影響力をもっていたということである。

一八四六年のはじめ、マルクスとエンゲルスは、ブリュッセルで共産主義通信委員会 (Kommunistische Korrespondenz Komitee) を結成し、これによって空想的社会主義にたいする果敢なイデオロギー闘争をおこない、正義者同盟の中央執行部に、科学的社会主義の基本的思想を浸透せしめようとした。そこでドイツにおける社会主義思想の二つの流れとしてのウァイトリングの共産主義と真正社会主義とが、前者は手工業職人を基盤とし、後者は都市の中小市民階級の意識を反映するものとして根強い影響力をもっていた。従って一八四五年から四六年にかけてのマルクスおよびエンゲルスの活動は、一方においてウァイトリングの共産主義の空想的性格を暴露すると同時に、他方真正社会主義の小ブルジョアの性格を批判し、それによって正義者同盟を科学的社会主義の拠点たらしめることであった。しかし著者も指摘しているように、マルクスとエンゲルスのウァイトリングおよび真正社会主義者への徹底的なイデオロギー闘争は、その両者を同一の次元において行われたものではなかった。ウァ

イトリングの共産主義は、ブランキの一揆主義よりもはるかに進んでいながら、しかもその弱点は、社会の法則的發展にたいする認識の欠如、階級闘争の理解が完全に欠如しているもとも原始的・革命的な働く大衆のいわば本能的衝動に基礎を置いているという点であった。とくに来るべきドイツ革命が共産主義革命であることを主張した。ウァイトリングの見解にたいしては、かつて一八三九年ブランキ主義の影響のもとになされた蜂起の失敗の経験に徴して、啓蒙と平和的な宣伝にその戦術を転換したシャッパールも反対し、マルクスと同じくブルジョアジーの役割の重視を強調した。³⁾ 一八四六年、正義者同盟内部において、革命についてのマルクスとエンゲルスのウァイトリングとの見解の差異は一層ひどくなり、ついに三月三〇日ブリュッセルの、共産主義通信委員会大会において、二つの原則的に対立する世界観のさげがたい闘争が明らかになった。ここでマルクスとエンゲルスは、ウァイトリングの共産主義革命の可能性にたいする楽観的考え方にたいして痛打をあたえたといわれ、いわゆるアンネンコフの手記によってその模様が紹介されているが、同時に当時やはり正義者同盟のなかで、真正社会主義の代表的存在であり、ウァイトリングとも密接な関係にあったクリーゲにたいしてもはげしい批判を試みた。

らず、その小市民的似而非社会主義的要求にたいするその関係を暴露したことであった。以上のように一八四五年から四六年にかけてのマルクスとエンゲルスの活動を観察するならば、彼らをしておくれたドイツの経済的社会的状態から当然現われざるをえなかった諸思想へのドラスティックな批判を敢行せしめたものが、ほかならぬマルクス主義の合理的科学的批判精神であったことはいうまでもないが、同時にこれはフランスの社会主義、イギリスの古典派経済学とならんで、マルクス主義の三つの源泉、三つの構成要素のひとつとしてのドイツの古典的哲学にたいする闘いとその克服、マルクス自身の革命的民主主義から革命的共産主義への移行にとって絶対に必要な過程であった。すなわち真正社会主義には、ヘーゲル哲学のきわめて反動的な側面としてのプロイセン絶対主義の理想化の残滓が濃厚にうかがうことができたからではなからうか。

エンゲルスは、イギリスの社会主義の新聞『ザ・ニュー・モラル・ワールド』の一八四四年第二五号、第三七号、第四六号に、「ドイツにおける共産主義の急速な進展」という論文を書いているが、その最初の論文のなかでつぎのようにのべている。

「ご存じのとおり、われわれドイツの理論家たちは、実行家となりつつある。また事実、われわれの一人は、オーエンやフーリエなどの計画を参考にして、またアメリカの共同社会でえられた経験や私とその繁栄をねがっているハーモニーにおける諸君自身の実験を役立てながら、実際的な共同社会の組織計画と規則とを作成するために招聘されている。この計画は、さまざまな場所で討

初期マルクス研究におけるひとつの問題

論され、修正をくわえられて印刷されるであらう。ドイツ社会主義者の間でもっとも活動的な文筆家はつぎの人々である。在パリのカール・マルクス博士、ケルン在住のモーゼス・ヘス博士、在パリのカール・グリュン博士、在バルメンのフリードリヒ・エンゲルス、ウエストファールレンのレーダ市のオットー・リューニン博士、ケルンのヘルマン・ピュットマン博士その他数人である。これらの人々のほかに、亡命するすべてのドイツ詩人のうちでもっとも傑出したハインリッヒ・ハイネが、われわれの隊伍にくわわり、一巻の政治詩を出版したが、そのなかには社会主義を説く数篇の詩もはいつている。⁵⁾

ここにはまだ真正社会主義者にたいする後にみるようなはげしい非難がみられないのだが、これは一八四四年ドイツにおける革命的状況がそれほど進展していなかったためと、空想的社会主義者にたいするマルクス・エンゲルスの批判が充分でなかったことが考えられる。やがて「ドイツ・イデオロギー」において、ユング・ヘーゲリアンや真正社会主義のドイツ的基盤、その小ブルジョアの・反動的な性格を看破したマルクスとエンゲルスは真正社会主義にたいする徹底的な批判を開始するのだが、それはエンゲルスによる二つの論文「真正」社会主義者についての二論文、すなわち一八四七年のブリュッセル・ドイツ語新聞第七三、九三、九四、九五、九六、九七、九八の各号に掲載された「詩と散文におけるドイツ社会主義」および「ドイツ・イデオロギー」第二巻の直接の継統としての「真正社会主義者たち」にもっともよくあらわれている。この二つの論文の

最初の方は、資本主義発展のおくれたドイツの小市民の代表者カール・グリュンが、自由独立の進歩的ブルジョアにたいする重圧下の停滞的小市民の憎悪をもって、このドイツの小市民体制を脅かすものに立ち向った点を克明に追求し批判しているのであるが、その場合、ドイツ市民の代表としてのゲーテのなかにひそむ小市民・ローマンの性格を重視し、そのブルジョアの・コスモポリタンの精神を無視していることを非難している。一方「真正社会主義者たち」では、真正社会主義の機関紙「ウエストフアリッセン・ダンフボート」(Westfälischen Dampfboot)とその編集責任者オットー・リューニング(Otto Luning)のいわゆる「ウエストフアレン社会主義」=複式の(Mode composé)真正社会主義(真正社会主義のしごく単純な段階を「単式」(Mode simple)と名づけるとすれば)の理論を批判し、その歴史的役割を論評しているが、著者フェルダは、この研究のなかで、オットー・リューニングの批判と克服によって真正社会主義の性格の暴露を行なっていることを強調しているのは興味深い。

ウエストフアリッセン・ダンフボートが、真正社会主義の機関紙となつたころ、マルクスもエンゲルスもあまりこれに注目しなかつたが、そのなかでリューニングがエンゲルスの「イギリス労働者階級の状態」から「プロレタリアートの生成と発展のための大工業の重要性」などを盗用することによって労働者階級の運動に影響を及ぼすようになってから、彼らはこの新聞に重大な関心を抱きはじめた。とくに、一八四六年早春ブリュッセルにおいてマルクス、エ

ンゲルスと知り合い、革命的な世界観に入り、リューニングへの批判をはじめることによって彼らの同志としての活躍をはじめた詩人ウアイデマイア(Weydemeyer)にも当時、思想的動揺がないわけではなかつたけれども、しかし彼は真正社会主義者としてとどまりながら合法マルクス主義者としての相貌をも呈するリューニングがあたえる思想的影響を無視するわけにはゆかなくなつた。

リューニングの政治的立場、著者によれば、一方においてそれはロシアのマルクス主義運動の初期にあらわれた「合法」マルクス主義者を想い出させるのだが、他方それは、ブルジョアの・資本家的発展を回避して、社会主義というものを小市民的基礎の上に実現しようとする点で、「ナロードニキ」(Volkstümlich)のような復古的・反動的の側面をもつという二重の性格をもつていた。従つてそれは、議会制度の不可避性を強調し、働く大衆のためにブルジョアのな権利と自由することの必要性を力説するウアイデマイアのマルクス主義理解からその思想形成を負いながら、マルクス主義を、真正社会主義と単純に結びつけようとしたところに問題があつた。

リューニングは、社会主義者と議会主義者が共通の目的のために、たとえば政治的精神的反動、封建主義と官僚主義に対する共同闘争の必然性を提起し、ブルジョア的な議会制度の利用の必要性を説き、ブルジョアジーが勝利をしめたのちは、彼らにたいするプロレタリアートの闘争がはじまると主張した点は、きわめて独創的で、マルクス、エンゲルスの思想と類似し、彼らに何程かの影響をあたえたと考えられる。

すでにのべたように、マルクスおよびエンゲルスの史的唯物論への到達過程は、既存の理論体系にたいする苛酷なまでに徹底的な批判と血みどろの闘いであり、それらの批判克服の過程を通じて独自の理論を陶冶したものであるとすれば、真正社会主義を非難し、その階級的基盤を暴露しながらも、絶えずそれとの闘争のなかで、それから学ぶことをも忘れなかつた点は、注意を払ふ必要がある。彼らは、リューニングの「ウエストフアリッセン・ダンフボート」にあらゆる非難や嘲笑をして皮肉をあげているにもかかわらず、それが、産業が発展し、資本主義的生産が進み、プロレタリアートの階級意識も比較的進んだライン地方においても重要な役割を見逃さなかつたし、ウアイデマイアもこの点を意識してこれに寄稿したのである。それゆえマルクスとエンゲルスは、ブルジョア階級が、一八四〇年代のはじめ、自由主義的な運動を指導しようとし、とくに一八四六年プロイセン絶対王政の土台をゆるがすほどの経済的危機の兆しが濃厚となつたとき、これを積極的に援助し、ダニエル(Roland Daniel)・ビュルガース(Heinrich Bürgers)・デスター(Karl Dyster)等をして、正しい方針に副つて運動することを指導した。すなわちマルクスとエンゲルスは、共産主義者が民主主義運動に積極的に参加するという信条のもとに、ケルン市におけるブルジョアの民主的運動を推進した結果、一八四六年六月二三日選挙民大会が開かれたのである。

著者は、ケルン市の市民大会の重要性を指摘し、その模様を当時の資料を駆使して詳細に描写している(10)ので民主的・ブルジョアの運

初期マルクス研究におけるひとつの問題

動における共産主義者の役割という観点から考察してみよう。注目すべきことは、共産主義者と密接な関係にあつたラヴォ(Ravot)が、「第三身分は、あたえられた条件のもとで、いかなる場合にもより高い階級の附屬物ではなく、「真実の代表者」、すなわち彼らの中から代表を選ばなければならぬ」と提案し、とりわけ、「第三身分は、自らを代表するにとどまらず、選挙権をもたないすべての身分の当然の代表者である。なぜならば、前者の利益は後者のそれに近いのであるから……」(11)と強調したことは、マルクス、エンゲルスがブリュッセル共産主義通信委員会からダニエルズとビュルガースにあてた手紙の内容、すなわち「イデオロギー的明確さこそ、現実のそして政治的に独立した活動のための活動を形づくるという(12)こと」と、労働者を主体とする広汎な大衆運動の主體的・客観的条件の欠如しているドイツにおいては、ブルジョアのな権利と自由のための民主的運動と請願による要求に、独立の労働運動の創出をも期待すべきであるという見解に一致するものであつた。

またデスターの指導とそのラヴォとの共同によつて、市民全体を闘いにまきこむためにひとつの綱領が提案された。それによれば、主要な努力目標(Hauptbestrebungen)として、「生活困窮者にたいする地方自治体の配慮」、「国民学校制度(Volksschulwesen)の制定と整備」などがうたわれていたことは、きわめて注目すべきことであり、今日われわれが革命的共産主義運動を考える場合に、大衆の日常的な利益と高度の政治的要求とを結びつけるという視点から、このケルン市の共産主義の活動は研究するに値しよう。もちろん、こ

れにたいしてブルジョア自由主義者の少数派は、この会議の合法性を問題にし、また選挙権のない一般大衆が、この会合に出席することに反対するという反動勢力のまき返しがおこったことも事実であったが……。

ビュルガスやデスターは民主的運動全体の方向を左右する決定的な勢力たる小市民階級の指導者にさえ接近して、彼らの救い難い窮乏化の原因が資本の力によるものであり、また言論統制の撤廃のために共同して闘うべきことを訴えたといわれ、大衆の初歩的な要求、彼らの日常的な不満から出発してこれを組織的な反抗にかえるためにあらゆる努力を払った。

小市民階級の民主主義者と共産主義者との共同闘争によって、一八四六年八月五日、ケルンのハーフシェン・ザールで開かれた大衆集会では、激昂した大衆は、政府の民主的運動にたいする専制的弾圧を非難した。このような大衆運動の圧力のもとで、ケルン市当局と自由主義的なブルジョアジー、他方政府官僚も妥協的姿勢をとり、つぎのような重大な譲歩をなさざるをえなかった。軍隊の市内からの撤退とこれに代る非武装市民軍の建設がこれである。これは共産主義者、民主主義者を指導者とする広汎な人民大衆の統一戦線の勝利であったが、しかしその民主戦線は充分に組織されてはおらず、真正社会主義者の不徹底な態度は、市民軍をプロレタリアートおよび民主主義者を中心とする民主勢力の軍隊とすることができなかった。いうまでもなくこのケルンの大衆運動は、右は自由主義的なブルジョアジーから、左は共産主義者までをふくむ広汎な連合統一戦

線であって、そのためにまず、労働条件の改善をはじめ労使関係の緊迫化とともに、次第にその強力なきずなは失われてゆくのであるが、一八四八年のドイツ三月革命の前兆としてのケルンにおける一八四六年六月事件および八月事件は、民主的運動における共産主義者の正しい戦術のたて方、そして小市民的な真正社会主義者にたいする実践の上での勝利を深く歴史に刻みつけたものであるといっても過言ではなからう。

(1) 拙稿「一八九〇年から一九一四年にかけてのドイツ労働運動における若干の問題」(三田学会雑誌、昭和三六年七月号)参照。

(2) Herwig Förder: Marx und Engels am Vorabend der Revolution — Die Ausarbeitung der politischen Richtlinien für die deutschen Kommunisten (1846-1848), 1960, S. 44.

(3) Förder: ebenda, S. 59.

(4) といっても、クリーゲの運動の進歩的側面を、マルクスおよびエンゲルスが全く評価しなかったわけではない。クリーゲはアメリカにおいて土地制度の改革を計画し、ニューヨークにおけるナンヨナル・リフォーマーの運動と秘密組織「ユング・アメリカ」によって、一八四五年ドイツの労働者による「国民改革協会」(Nationalreformationsverein)を結成した。こうした運動——オーエン以来の——については、「近代に成立し今も存続している共産移住地の記述」(Marx und Engels, Werke, Bd. 2, S. 521) (邦訳 M・E・全集、大月版第二巻 五四八頁以下)。

(5) Marx und Engels, Werke, Bd. 2, S. 512. 邦訳五四〇頁。

- (6) Ebenda, Bd. 4, SS. 240-241. 邦訳第四卷二五一頁。
- (7) Förder: ebenda, S. 78.
- (8) Ebenda: ebenda, S. 81.
- (9) Ebenda: S. 93.
- (10) Ebenda: S. 99 ff.
- (11) Ebenda: S. 100.
- (12) Ebenda: S. 96.
- (13) Ebenda: SS. 100-101.
- (14) Ebenda: SS. 104-105.

III

初期マルクス主義研究の課題は何か、この大きな問題を追究しフエルダーの著作を通じて、真正社会主義の階級の性格を捉えようとして、その半分も達しないうちに、すでに余白はつきてしまった。

一八四年以前のマルクスとエンゲルスの努力は、すでにのべたように、反動的な小ブルジョアジーのイデオロギーとしての真正社会主義の批判と克服に注がれていたことは、ドイツ・イデオロギーとそれ以後の著作に明らかである。それと同時にこれと密接不離の関係にあったブルードン主義への徹底的非難にもむけられたことは、それらがウアイトリングの思想とは別の意味において、労働者階級が来るべき一八四八年革命の意義を正しく評価するのをさまたげるといふ客観的な認識によつていたことはいうまでもない。ウアイトリングの思想が、フランス共産主義の理論的影響のもとにドイツ労働

初期マルクス研究におけるひとつの問題

者階級への影響において急速に色あせてしまったのに反し、真正社会主義者のイデオロギー(エンゲルスの言葉をかりれば、それが単式から複式になるに従って大胆になる⁽¹⁾)が、さまざまな形で労働者階級の運動に影響をもつていたのは、資本主義的發展のおくれたドイツの中小市民階級の間、そのための肥沃な土壌が存在したからであった。だとすれば、マルクスとエンゲルスがこれにたいして終始一貫して痛烈な批判を加えたのは当然ではなかったか。われわれは最後に今一度、真正社会主義者の性格を考察し、結論にかえらう。

フエルダーによれば、真正社会主義者の運動はさきにものべたように、ロシアのナロードニキと似ていた。すなわち一方において封建的秩序にたいする反抗と、他方において資本家発展への恐怖である。彼らは言葉の上では、フランスおよびイギリスの市民的・資本家的諸関係を批判しながら、祖国ドイツにおいて市民的・資本家的社会秩序を貫徹させることの重要性を忘却もしくは無視しようとする⁽²⁾。政治革命と市民的権利および政治的自由との結びつき、それらの重要性を強調しない点は、ナロードニキの特殊性であるが、小市民層の代表者である点は、真正社会主義と酷似しているといえよう。

ただ、ロシアにおいては、ナロードニキの運動は、広汎にして革命的な農民運動の上に立っており、その意味では革命的な性格をもつていたが、真正社会主義者の運動の母胎は、農民ほど搾取されていない都市の小市民層にあったところに、ナロードニキがもつていた戦闘性の欠如がみられた。従つてそこにはブルジョア民主主義は

底流でしかありえず、階級闘争の激化と民主主義革命を前にして、絶対主義勢力に妥協する面を濃厚にもっていたといえるのではなからうか。初期マルクスにおけるイデオロギー闘争が、真正社会主義者にたいしてもっともはげしくおこなわれた歴史的・理論的根拠は、このような理由によつていたといえるであらう。

(1) Marx und Engels: Werke, Bd. 4, S. 251. 邦訳二六二頁。

(2) Förder: ebenda, SS. 142-143.

—一九六二・一・一〇・深更—

マルクシズムのフランス流入に関する一考察

—ジュール・ゲードの思想的展開—

村田光義

フランスのみならず世界の社会主義運動に大きな意義をもったパリコミューンが、血の海の中に葬りさられてより数年をいわずして、ティエールによつて「もう話されることもなく、すっかりかたづいてしまった」と思われた社会主義運動が、再びフランスの地によみがえった。マルクシズムのフランスへの流入を、この再興した社会主義運動との関連の中にとらえようとするのが本稿の目的である。

マルクシズムの影響がフランス社会主義運動の中に現われたのは、パリコミューン以後であるという点で諸説は大体一致している。^(注1) A. Zévas は「コミューンの人々の大部分はマルクスの名をえしらない。市庁政府の中でマルクスとマルクシズムを唱えていたものはただ一人、フランケル (Leo Frankel) だけである」^(注2) といひ、S. Bernstein もマルクシズムはコミューン以前のフランスでは、殆んど知られていなかったとのべている。^(注3) またエンゲルスとラファエルダ夫妻の書簡集を編纂した E. Bottigelli も「コミューン当時マルクスの思想は、フランスには全然普及していなかった」と記している。^(注4)

マルクシズムのフランス流入に関する一考察

では何時頃、誰によつて、どのようにマルクシズムはフランスに導入されたのか。この問題をマルクス派の第一人者と目される、J. ゲードの思想的展開を中心に——コミューン以前のフランスとマルクシズムとの関連を再検討する意味をも含めて——見てゆきたい。

(注1) エンゲルスはマルクスの「フランスの内乱」ドイツ版第三版への序文で「コミューン議員の少数のもののみがドイツ科学的社会主義を唱へた」として E. Vaillant をあげている (Der Bürgerkrieg in Frankreich mit Einleitung und Anmerkungen von A. Conrady (1920) p. 130. 岩波文庫版「フランスの内乱」一六六頁) が、Ch. Longuet は Vaillant はまだブルードン主義者であったとして「このことを否定している」(同書一八〇頁)

(2) A. Zévas: De L'Introduction du Marxisme en France (1947) p. 49. 以下 Zévas: De L'Introduction 以下。

(3) S. Bernstein: The Beginnings of Marxian Socialism in France (1933) p. 186. 以下 Bernstein: The Beginnings 以下。